

はじめに

2020年の春、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて最初の緊急事態宣言が出されていたときの話である。我が家ではふたりの子どもを世話しながら、リモートで仕事をするようになった。夫婦で交代して子どもをみながらフレキシブルに仕事を進められるとよいのではないか、あわよくば学校で学べないようなことも教えたい——そんな目論見もくろみが甘かったことを思い知らされるまでに、そう時間はかからなかった。

子どもがふたりいると、ほとんど自然に揉めもごとが起きる。そして、それを仲裁するのか、放置するの考えるだけでもいちいち集中力が削そがれる。子どもたちが外に出て遊びたくても減多にタイミングが合わず、彼らのプラスチックはたまるばかり。昼の休憩中には妻と一緒に4人分の食事を手際よく作り、食べさせ、後片付けをしなければいけない。昼寝する子どもと一緒に寝落ちしてしまったことが何度あっただろうか？

結局、こちらが仕事に集中したければ、動画配信サービスで子どもにアニメや映画を見せて

おくくらいしか選択肢がない。こんなことを育児と呼んでよいのだろうか、そうほんやり考えながらも毎日を乗り切るだけで精一杯だった。子どもと過ごした時間はかけがえのないものだったけれど、緊急事態宣言が終わったときには正直安堵あんどした。

私はつねづね、「イクメン」という言葉に違和感を持っていた。^{*i}この言葉に込められた「育児をする男性は格好良い」という軽いニュアンスが、どうにも好きになれなかった。けれども、その言葉の何が本当に問題であるかをはっきり言語化できたのは、このときだったのかもしれない。

育児はひとりでは完結しない。^{*2}私の場合、自分の子どもたちがすすくと成長しているのはまず妻の献身的な努力によるところが大きだし、子どもたちの祖父母にも折に触れて助けられている。保育園・小学校・学童保育などで働く方々は、もしかしたら私たち夫婦よりも多くの時間を子どもと共有しているかもしれない。多かれ少なかれ、子どもはこのような諸々のネットワークのなかで育まれるものであろう。

ところが「イクメン」という言葉を使うとき、そのようなケアのネットワークは後景に退き、父親と子どもという限定された関係性のみが切り取られてしまう。要するに、「イクメン」と

という言葉の背後には、「父親が育児に参加すれば問題は解決する」という単純化された思想が見え隠れしていないだろうか？

私は「男性は育児をしなくてよい」と主張しているわけではない。そうではなくて、「男性が育児をするだけでは不十分である」というのが本書の提起する論点のひとつである。母親に比べて父親が育児を担う割合が大幅に少ないという日本の現状に鑑みれば、「イクメン」という言葉にはある種の存在意義があったかもしれない。けれども、いつまでもその言葉に固執していると、見えなくなるものがあるのではないだろうか？

私は近年、育児に携わる男性がアメリカの文化のなかでどのように表象されているのかを研究してきた。本書のなかで詳しく論じるが、たとえば映画『クレイマー、クレイマー』から『マリッジ・ストーリー』に至るまで、仕事と育児を両立させる父親をテーマにした作品は意外なほど多く存在している。

その一方で、アメリカという社会が育児に携わる人々を公的に支援してきたとは言い難い。何しろ、有給の産休・育休制度が存在しない先進国はアメリカだけなのだ。アメリカでは育児と仕事を完璧に両立させる父親たちがメディアを賑わしている一方で、育児を支援する体制が

整備されていない。一見すると、以上の二点は矛盾しているように思われる。

だが、ここで問題の立て方を変えてみてはどうだろう。すなわち、アメリカという国家において育児を支援する体制が整備されていない背景の一部には、偏った「理想の父親像」を生産し続ける文化があるのではないだろうか？ 育児をする男性が「どれだけ」表象されるかというのも確かに大きな問題であるが、より重要なのは彼らが「どのように」表象されるかという点である。

「イクメン」という言葉はある種の偏見を助長する可能性をはらんでいる。したがって、本書では「イクメン」という言葉を限定的に使用する。

本書のなかで「イクメン」という言葉が使われるとき、それは主に文化において表象されるある特定の父親像を指し示している。私がこの言葉を使用するのは、「イクメン」という言葉が含有する価値観——育児をする父親は格好良い、父親が育児に参加すれば問題はすべて解決するなど——をこれらの（フィクションとしての）父親像が反映している限りにおいてである。

そのようなニュアンスを抜きにして単に「子育てをする父親」について言及するときは、「育児を担う父親」、「子どもを育てる父親」といった類いの表現を用いる。

育児と仕事を両立させる「イクメン」的な父親がアメリカ文化のなかに現れ始めたのは、1970年代後半のことである。これは日本の場合よりも、かなり早い。それにもかかわらず、日米における「理想の父親像」には重要な共通点がある。一言でいえば、それは、育児が「格好良い」こととして、ひいてはライフスタイルの「選択」の問題として理解されることである。この言説のなかでは仕事と家庭を柔軟に両立させる父親が称賛される一方、それができない父親は「イクメン」というライフスタイルをあえて「選択」しなかったのだとみなされて非難される。育児に携わる父親は革新的で格好良い——日米の「理想の父親像」に共通したそのようなメッセージは、育児における個々の父親の「自己責任」を強調し、父親間の経済的な格差を隠蔽するばかりか、ケアのネットワークとしての育児を変質させてしまう。

以上のような事情をふまえて、本書ではアメリカの文化を分析する際も、必要に応じて「イクメン」という言葉を使用する。「イクメン」という言葉に見え隠れするジェンダー観は、日本とアメリカに共通するものであり、そのジェンダー観は新自由主義的な文化や政治経済のなかで形成されてきた——そんなことを、本書では議論していきたい。

社会学的な視点から「イクメン」について分析した論考は多いが、その文化的イメージを論

じた研究は稀^{まれ}である^{*3}。本書では日米の歴史的な背景と照らし合わせつつ、映画、文学、雑誌、単行本などさまざまなジャンルにおける「イクメン」の表象を読者の皆さんと一緒に読み解いてみたい^{*4}。

「イクメン」という文化的なイメージを俯瞰^{ふかん}すると、どのようなパターンが浮かび上がってくるだろうか？ 「イクメン」という言説はどのような歴史的背景のもとで誕生し、どのように変化していったのだろうか？ 日米における「イクメン」の文化的な表象には、どのような相違点があるのだろうか？ 「イクメン」の言説から不可視化されているものは何だろうか、そしてそれを可視化したときに世界はどんな風が変わって見えるだろうか？